

## 10. 筒井町天王祭

江戸時代、建中寺前、情妙寺前は各々に天王祭を執行していた。

◇建中寺前 文化・文政時代には作り物を出し群衆を集めていた

◇情妙寺前 天保3年より山車祭を始めた



明治20年、筒井町(一・二・三丁目)、裏筒井町(一・二・三丁目)が神皇車を購入し、湯取車と共に天王祭で山車を奉曳した。筒井町天王祭の誕生である。

これは、明治4年に両町が同じ町(筒井町)になったことによる。

明治21・22年は大曾根の胡蝶車も共に奉曳した。

天王祭とは疫病退散を願い、津島神社の祭神牛頭天王をお祀りする御神事である。筒井町では津島神社へ代参し、御祈祷を受けた御札を天王社に、田楽札を各戸に祀る。山車の四本柱の北東側(大将座の東側)の柱に御札が祀られる。町内の四隅には櫛が備え、曳行路には注連縄が張られ、お祭り町内が形成される。曳行する山車はお祝儀を頂く家々で、からくり人形を披露し無病息災を祈る。天王祭は庶民に密着した信仰心の厚い祭礼である。祭礼日は6月第1土曜日・日曜日（旧祭礼日は6月1・2日）





## ①神皇車 文政元年（1817）の作

- 文政元年に三之丸天王祭の見舞車として  
広井村新屋敷で製作
- 明治20年(1887)建中寺前が新屋敷より購入

### ◆からくり人形 龍神への変身(面被り)

神功皇后が三韓征伐におもむかれる時、海上に  
龍神があらわれて金の玉を海に投げ入れたら荒波が  
静まり無事に航海が出来たとの伝説によるものである。

- ◇神功皇后 竹田源吉の作 天保13年作
- ◇武内宿弥 竹田源吉の作 天保13年作
- ◇面被り巫女 美濃屋三右衛門 安政4年作
- ◇磨振り 作者不明 安政4年作

### ◆お囃子

- 車切 •狂言神楽 •神楽 •早神楽
- 人形囃子 「下り葉」「楽」「囃子」「面被り」の構成
- 帰り囃子 「開化」をゆるやかにした曲

※帰り囃子は明治20年頃文明開化と言われた当時、  
西万町の伊藤忠成氏が門前町の陵王車の為に  
作曲したもので「開化」と呼ばれ由緒ある曲である。



◆大 幕

◇青色羅紗地に波に千鳥の刺繍 (波は金糸刺繍)

(初発は文政元年作の猩々緋の無地幕)

◇三色幕縦継ぎ(晩幕)

◆水引幕

白羅紗地に十二支の刺繍

(初発は紫地)

下絵は江戸時代後期郷土の画家、森高雅、  
山本梅逸、渡辺清らの共作で工芸技術の  
粋を集めたもの

◆天幕 紫地に木瓜紋の白抜き  
(紫幕)

◆改 修

昭和28年に朱塗りに替える





## 神皇車の装飾

■天幕 (紫幕) 紫地に木瓜紋の白抜き

- ・戦の陣所を表現
- ・神域を表している
- ・穢(けがれ)をはらう

■水引幕 白羅紗地に十二支

牛頭天王の本地仏  
薬師如来の守護神  
・十二神将(干支神)

十二の月、時、方角  
を守護する



十二支



■大幕 青羅紗地に波に千鳥  
・海を表している

■提灯 五岳眞形図: 道教の御符(ごふ)  
・兵刃の害を受けない  
・龍神が守護し水難を免れる



■朱塗り 宮殿、神社仏閣  
・魔除け

■鍔金具 葵葉 「豊かな実り」「大望」  
牡丹 「花王」「花神」

装飾は全て神功皇后の三韓の戦いがモチーフ

## ②湯取車 万治元年作(1658)

- 万治元年(1658)東照宮祭礼車として桑名町が製作
- 天保2年(1831)桑名町が車輛を新造  
古車を情妙寺前が購入

### ◆からくり人形 湯取神事

白幣を持つ神職を置き、その前に忌竹を立て、  
注連縄を張り、下に湯立釜を据える、神子が両手に  
笹葉を持ち神事を行ない、細かい紙切れを  
湯花とし四方に吹き散らす。  
前人形は台座に笛吹きと太鼓打ちが乗る

- ◇安倍晴明(大将)
- ◇神子
- ◇笛吹き
- ◇太鼓打ち

延享2年(1745)  
治郎八の作  
(張州雑誌の記録)





◆お囃子

・あめふり囃子

東照宮祭橋弁慶車の帰り囃子で  
「七間町」と呼ばれる大変由緒ある曲  
道中囃子に使用

・しゃぎり

・道行

・人形囃子

・しんぐるま(帰り囃子)

◆大幕

◇羅紗立継(猩々緋、紺、緑の三色帯)

◇猩々緋の無地幕

◆水引幕

◇猩々緋に雲龍の刺繍 森高雅下絵

◇白羅紗に麟、鳳凰、魚の刺繍

渡辺杏堂の下絵

◆改修

明治21年出高欄にする





# 筒井町天王祭 祭礼風景 令和5年・6年

